

介助犬と作業療法

原 和子

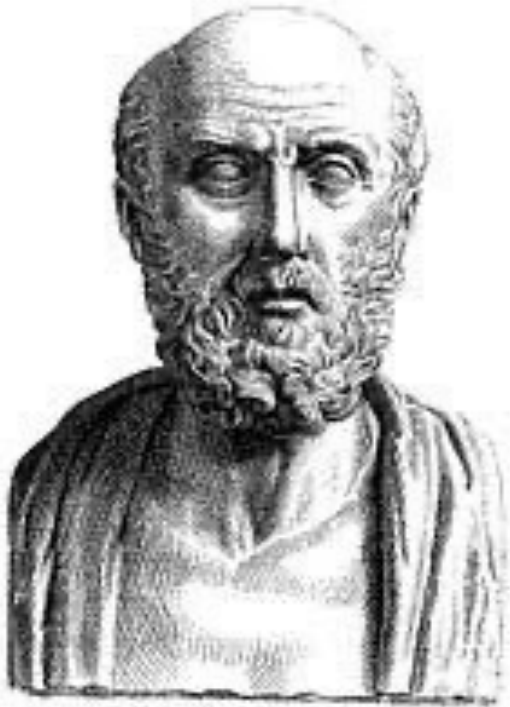
目 次

- 作業療法とは
 - 作業療法の歴史
 - 作業療法の発祥
 - 人道主義
 - 現代の創発パラダイム
 - 作業療法における介助犬の位置づけ
 - 直接的効果と相対的効果
 - 介助犬希望者・使用者評価
 - 介助犬との生活を断念した症例から学ぶこと

作業療法とは



作業療法の歴史：発祥



BC460-370、ギリシャ、ヒポクラテスは精神患者の回復のために体を使う作業、楽しい作業をすすめた。



AD1世紀、ガレノス「仕事は天然の医師なり」

人道主義(道德的、倫理的)療法 moral treatment



作業療法概論

「鎖からの解放」
患者を解放するピネル
(wikipediaより)



フランスの精神科医
18世紀後半

日本の作業療法発祥

- 平安時代

京都府左京区岩倉: 精神病患者
の療養地

大雲寺の観世音が靈驗あらた
かとして有名

全国から精神病患者が集まる

周辺の民家に宿泊し、散歩、
家事、農耕、機織り などの
作業に従事した。



現代の創発パラダイム

(Emergence of the Contemporary Paradigm)

- 作業システム理論

- 作業能力障害は疾病や機能障害の結果ではなく、環境によって引き起こされる (G. Kielhofner)



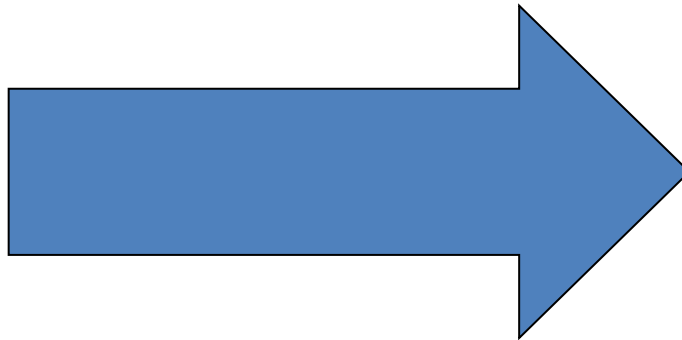
- 作業による創発

- 作業機会提供
- 環境適応(バリアフリー) → 作業参加 → 健康状態
- 道具と技術提供
- 問題解決カウンセリング

作業療法における介助犬の位置づけ

作業における介助犬の有効性 (直接的効果と相対的效果)

- 心身機能・構造レベル障害の軽減

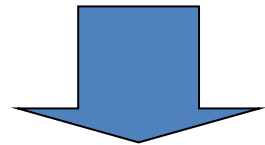


- 活動・参加の広がり



介助犬希望者・使用者評価

- 作業遂行評価
 1. 意志：興味、価値、個人的能力の自覚
 2. 習慣：日常的な活動、役割
 3. 心身機能・構造
 4. 環境：物理的、経済的、人的、文化的



作業遂行障害と潜在能力の確認

作業遂行障害と能力の確認

- **運動能力**：姿勢、可動性、協調運動性、力、持続性、ペース
- **処理技能**：知識、時間、空間、対象の使い方と適応性
- **伝達・交流技能**：リスクコミュニケーション、
介助犬への指示

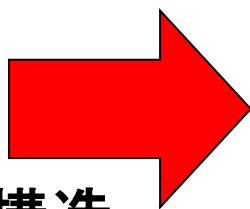
作業目標設定

- 長期ゴール: 夢
 - 中期ゴール: 希望
 - 短期ゴール: 義務と権利
1. ニードの顕在化
 2. 二次的障害の予防
 3. リスク回避、安全、安寧



フォローアップ

- 意 志
- 習 慣
- 心身機能・構造



- 環 境
 1. 補助犬育成団体
 2. 社会の理解・支援
 3. 経済・住宅……



- 課 題
 1. 関係作り
 2. 世話
 3. 社会的責任…

- 作業行動

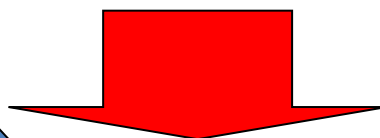


フォローアップ

- 環 境

1. 介助犬育成団体
2. 社会の理解・支援
3. 経済・住宅・・・・

- 意 志
- 習 慣
- 心身機能・構造



• 作業行動



- 課 題

1. 関係作り
2. 世話
3. 社会的責任・・・



フォローアップ

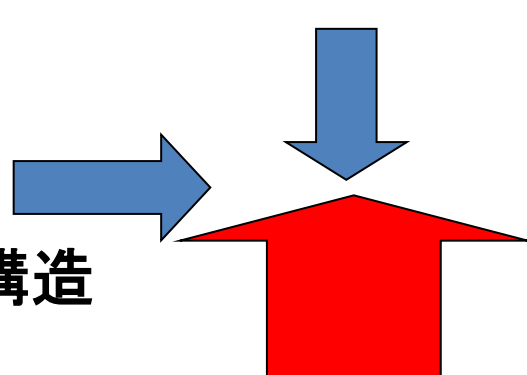
- 環境

1. 介助犬育成団体
2. 社会の理解・支援
3. 経済・住宅……

- 意志

- 習慣

- 心身機能・構造



- 課題

1. 関係作り
2. 世話
3. 社会的責任……

- 作業行動





介助犬との生活を断念した症例
から学ぶこと

症例紹介

- S. N氏（48歳 男性）
- 脊髄損傷（18歳時、バイク事故によりC5/6完全損傷、四肢麻痺。頤椎前方固定後、リハビリを経て26歳時より、車椅子対応家屋に母親と生活。別棟に兄夫妻が住む）
- ADL: 自立（BI 80） 車椅子使用 車の運転可
- 住居: 1年前より自宅を出てアパートで独居
- 職業: 福祉施設の事務職
- 余暇: 車椅子バスケットボール、友人との交流（酒を飲む、食事に行く、旅行 など）

介助犬との生活暦

- ‘99年10月 介助犬(厚生労働省の研究モニター)貸与されるも、網膜色素変性症により返却
- ‘01年 5月 次の介助犬貸与
 - 7月 合同訓練終了
 - 10月 協会認定テスト不合格
 - 12月 再認定テスト(ぎりぎりの線で)合格
- ‘02年 2月 介助犬認定式
- ‘02年 5月 優良家庭犬認定
 - 12月 S氏 入院(膀胱炎)
- ‘03年 9月 アパートに移り、介助犬の世話に負担感
- ‘04年 4月 介助犬を育成団体に返還

介助犬との生活ストーリー聴取方法

- 介助犬に関する自由な叙述面接
- 半構成的面接

‘99/10 COPM(カナダ作業遂行測定)

‘04/8 OPHI-II(作業遂行暦面接・改訂版)

OCAIRS(作業ケース分析面接)

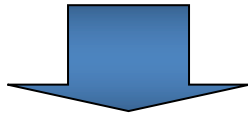
介助犬に関する質問

- 介助犬がいて良かった点
- 介助犬に対して抱いていた理想
- 介助犬の「主人」になることについて
- 自分の思う「介助犬を手放すことになった」理由
- 必要だった手助けは何か

介助犬の効果について(叙述)

- 上肢機能の補完(物の拾い上げ・運搬)

「人に頼みにくいけれど、やってもらえると助かることを、介助犬がしてくれる」



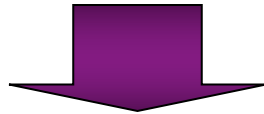
- 「人に頼るのが苦手な自分には合っていた」
- 「ただ一緒に過ごすだけでも楽しい」

介助犬の日常的基礎訓練について

- 「毎日コツコツやるのは意外に難しい」
- 「何とかなる」
- 「身体がこうだから」



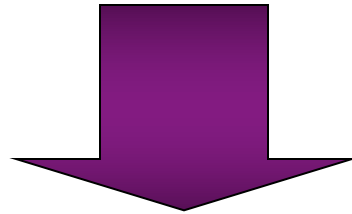
「ついつい怠ってしまう」
「やろうと思ってもできない」



「上手いかなくなった」

介助犬の世話について

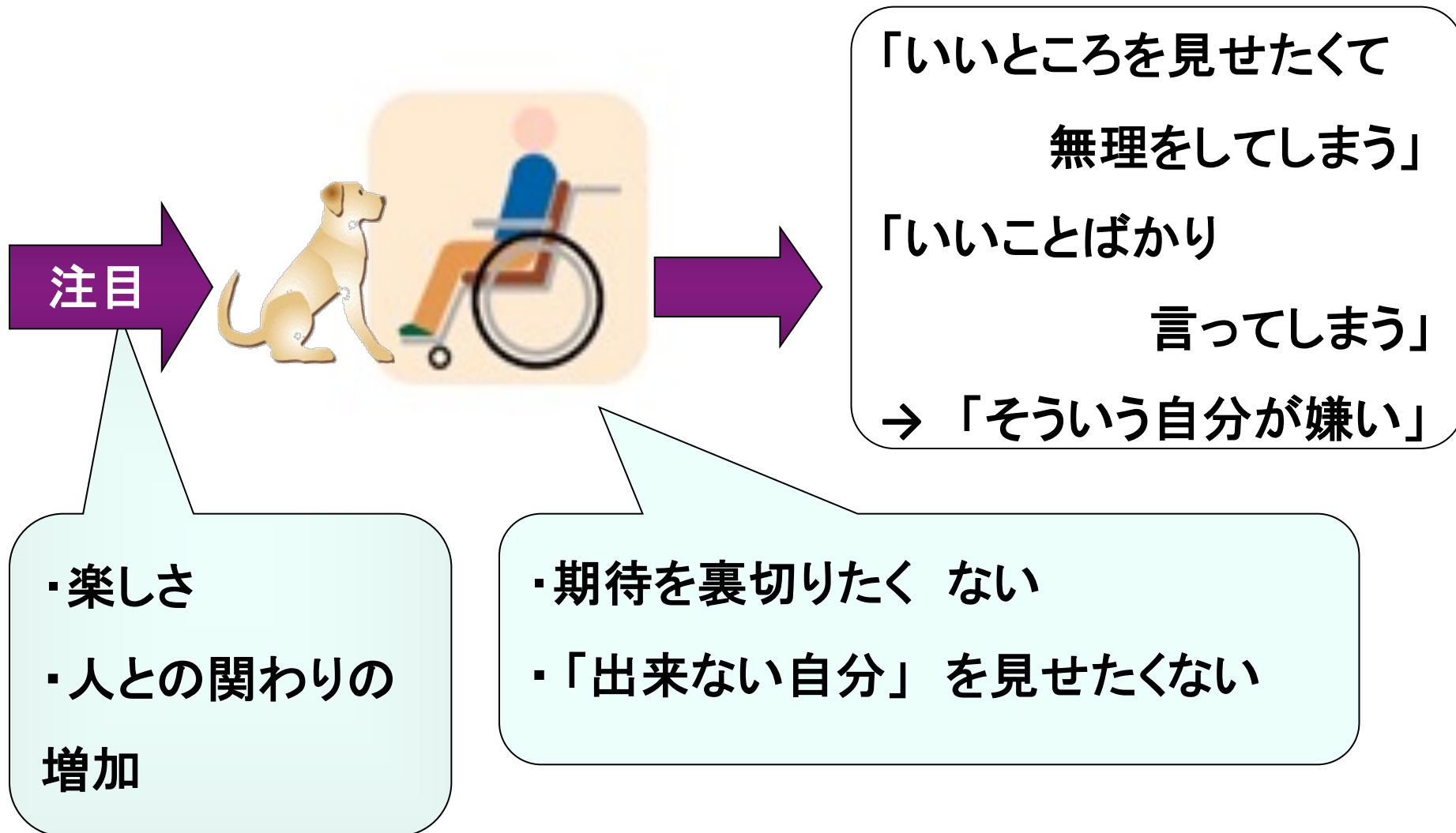
- ・ 食事、排泄、衛生管理などの日常的な世話は、介助犬使用者の責任



しかし・・・

「毎日きちんと、限られた時間で行うことは大変！」
「手伝ってくれる人がいたらよかった」

介助犬モニターについて



介助犬育成団体について

- 育成団体が遠距離に位置しているため、躰、管理等の相談は電話のみの対応で、答えは分かっている
 - 自分の能力不足を自覚した
 - 苦労は想像以上
- 「介助犬を甘く見ていた」
- 「自分で『介助犬にできること』について勝手に線を引いていて、育成団体に自分の希望を言わなかった」

COPM (カナダ作業遂行測定) '99/10

- セルフケアは時間がかかるが自立
- 公的なアドバイザーやサークル役員として活躍
- 趣味などが充実
- 介助犬を必要とする項目は無い

作業遂行	重要度	遂行度	満足度
トイレ・入浴	9	5	5
更衣	9	6	7
コンパ	9	10	8
仕事	7	8	8

OPHI-II(作業遂行層面接・改訂版) '04/8

- 作業同一性尺度 3～4
- 作業有能性尺度 2あるいは4
 個人的遂行基準を満たす
 責任に対して時間を組織化する
 役割を果たした
 習慣を維持した
 満足を達成した
- 作業行動場面尺度 1から4
 家庭-生活・社会的集団
 家庭-生活・作業形態

評定
4=有能
3=良好
2=やや障害
1=極めて障害

OPHI-II追加記録

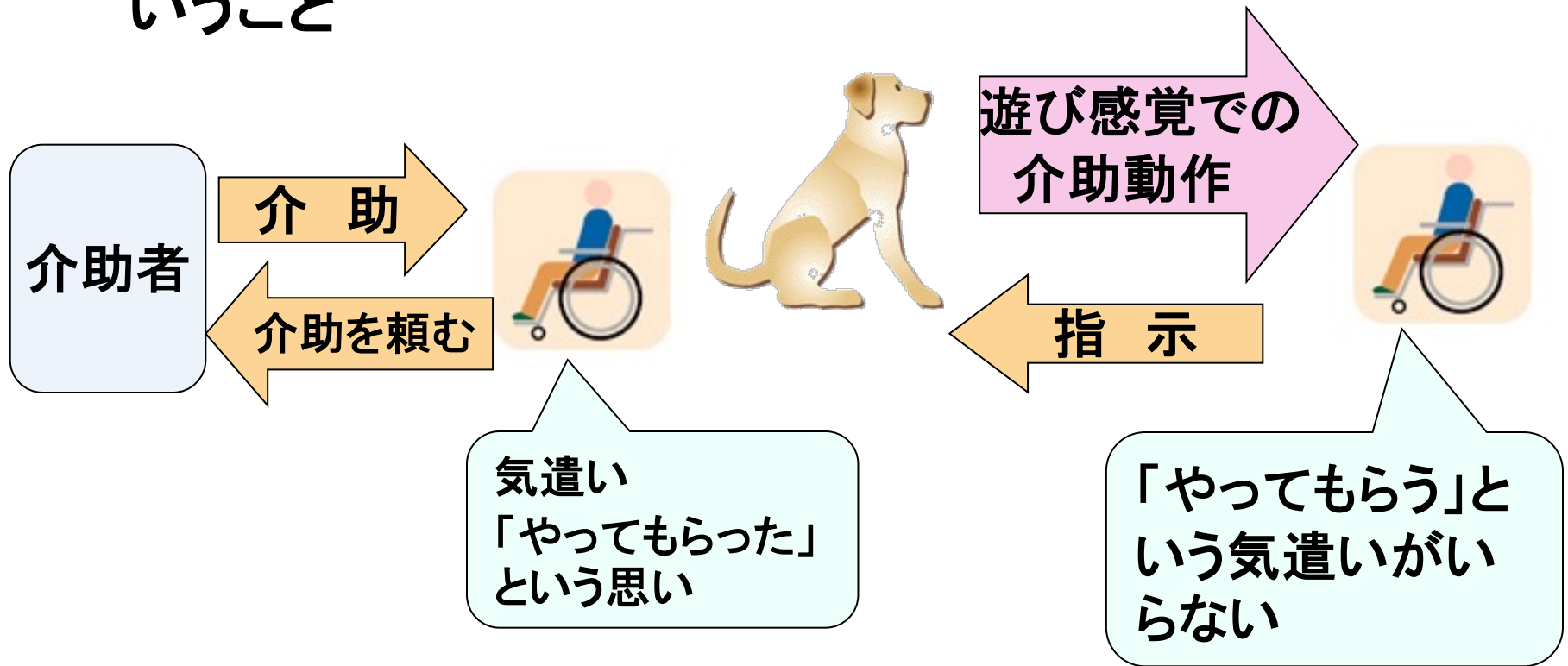
- 作業役割：自分で選択できる範囲でやらざるを得なかった。「崖淵」→ やればできる
- 日課：落ち着いているが不安がないとは言えない
- 作業行動場面： Key Person=母親→彼女
- 役割：彼女の精神的サポーターであるが、その反対は期待できない
- 活動選択：障害や困難に際し、最大限努力する
- 生活上の重大な出来事：彼女、介助犬

OCAIRS(作業ケース分析面接と評価尺度)要約

個人的原因帰属	4	介助犬VS彼女では、彼女を選択
価値と目標	4	作業計画は価値や目標と一致
興 味	5	定期的な複数の活動参加
役 割	4	いくつかの活動役割を話す
習 慣	5	作業バランスが保たれている
技 能	3	作業遂行制限がある
出 力	5	技能と習慣を統合できている
物理的環境	4	車いす生活の問題が述べられた
社会的環境	4	人間関係等、かなり問題ない
フィードバック	3	多少は適応的に変化できる

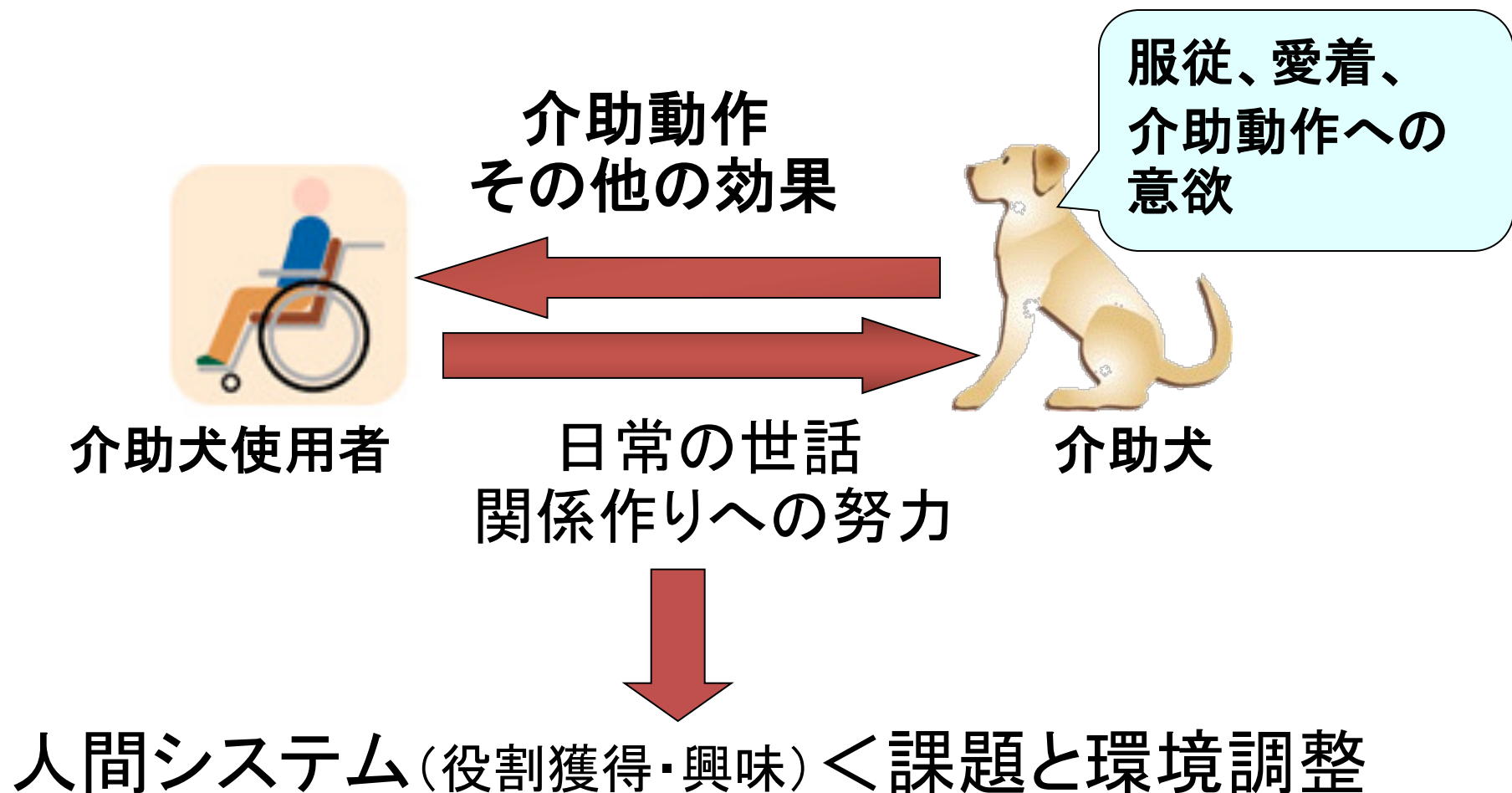
介助犬の効果を認めていた

- 個人的原因帰属感の向上、人に頼らなくても良いということ



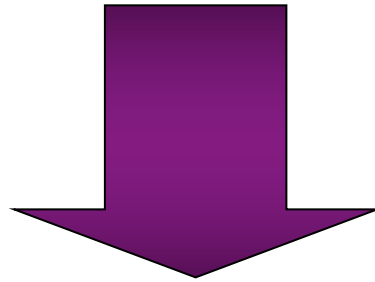
- 動物の持ついわゆる「癒し」の効果

介助犬に関する課題が増した



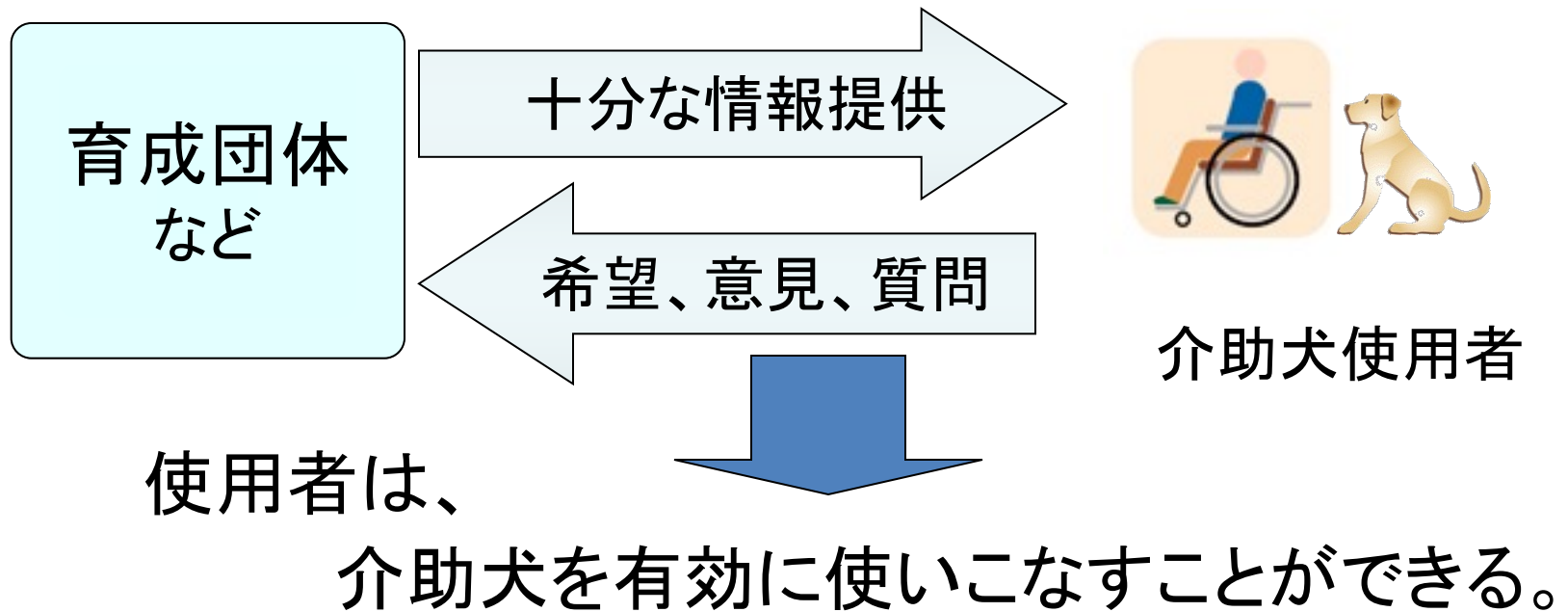
介助犬モニターとしての環境

- 介助犬モニター使用者への注目
→ 介助犬使用者の「先駆け」としての役割を負うことになる



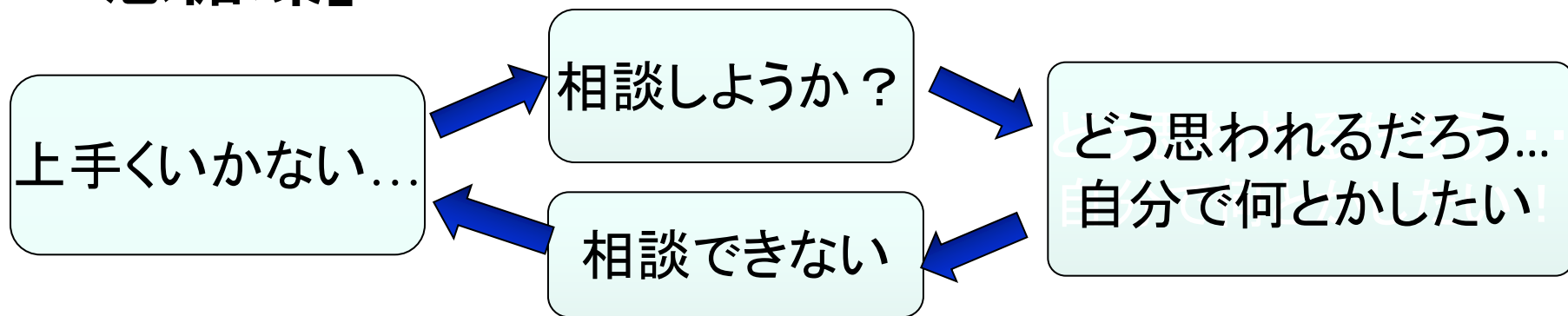
使用者にとっての良い影響・悪い影響

考察： 介助犬に関する情報不足



Sさんの場合：育成団体への要望

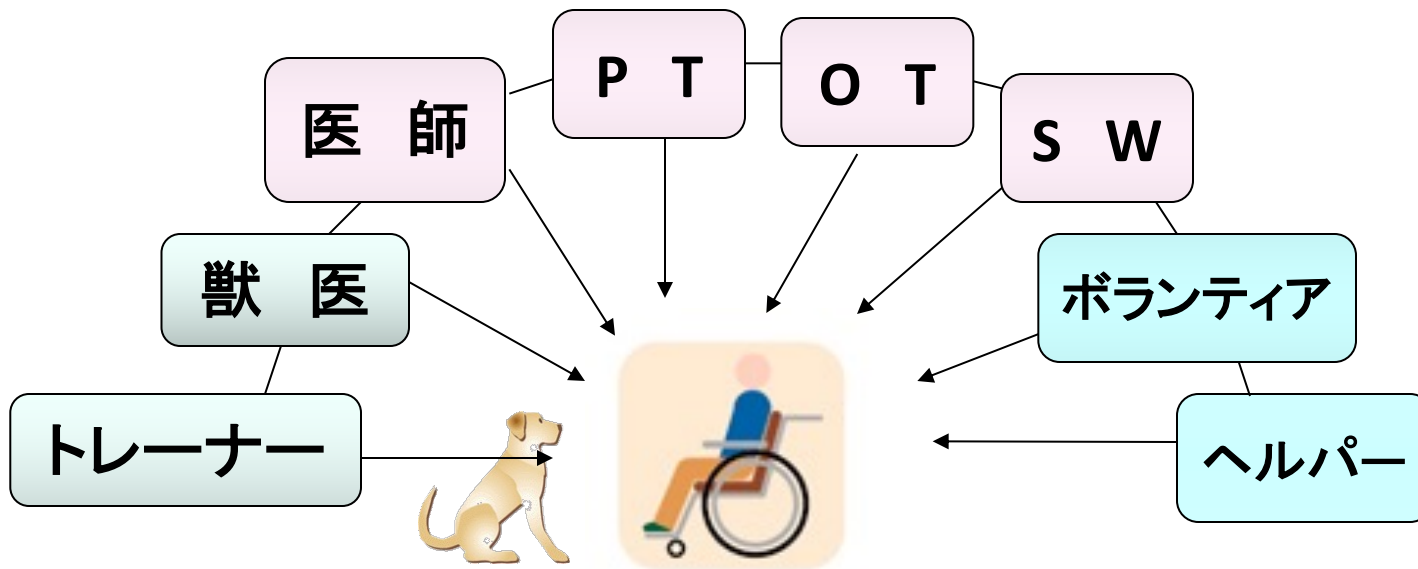
- 「育成団体の人となかなか会えなかった」
- 「悪循環」



- 「日常的な手伝い」
- 「医療や福祉関係の人が入ってくれることを期待」

課題1: 社会的支援

- 必要に応じて、様々な立場の支援者の関わり、連携が必要
- 使用者である障害者を中心に見る専門家の協業が必要

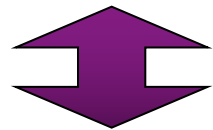


課題2：作業療法士の介入

- 使用者に対する介助犬との作業遂行評価と問題解決への計画
- 距離的にも精神的にも身近であることが必要
→ 近くにいるOTに「気軽に」話を聞いてもらえることの重要性

まとめ

- ・ 介助犬は、多様な介助を可能にし、使用者の個別性にあわせた発展的利用が期待できる



しかし・・・

- ・ S氏の「介助犬の返還」という決断
→「選んだ」のではなく「返すしかなかった」



- ・ 今後、介助犬の可能性を最大限に引き出していくために、作業遂行障害に焦点をあて、人間システムを支援するOT介入が望ましい